

特集 愛飲者インタビュー

治療法のない 慢性膿皮症という難病 SODを信じて 飲み続けること3年

奈良県にお住まいの内山亮太さん（19歳）
祖母の高木美保子さん（73歳）

日本SOD研究会報

発行元 日本SOD研究会 宮城
住 所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川 1-15-2 B棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
<http://www.niwa-medical.com>

今回の愛飲者インタビューは、一通のお手紙から始まりました。送ってくださったのは、奈良県にお住まいの大学生の青年。内山亮太さん19歳。まずは、その内容の全容を紹介させていただきます。

『高校一年生の頃、青春ニキビと共に頭に出来物ができました。はじめはニキビの親玉だと思っていましたが、それは次第に数も増え、大きさも増していきました。一番大きいものは、周りの毛が抜け落ち、50円玉程のハゲが出来てしまいました。気になり病院に行くと、塗り薬だけ処方され、一向に良くなりませんでした。3件目の病院で慢性膿皮症という病名を告げられました。この病気は難治性で手術をしても治ることはないと言われてきました。

僕は本当にショックでした。今から大学生活や社会人として楽しい事が沢山待っているのに、人前に出るのに常に頭を気にし、オシャレもできないなんて…。気分が落ち込みました。

そんな時、祖母からSODを勧められ、少しでも改善できるならと思い、ただ治したいの一心で3年間、毎日SODを飲み続けました。もちろん、すぐに変化は出ま

きれいな筆跡でわかりやすく、素直な心情と共に経過を綴った文章に、編集やスタッフも大変感銘を受けました。ご本人もおっしゃっているように、「同じような悩みを持つ人がひとりでも多くSODと出会えることを願っている」とのこと、これはぜひ会報で紹介させていただきたいと、取材をお願いしました。

応じてくださったのは、亮太さんの祖母、高木美保子さん。

「亮太は、学業やサークル活動などで忙しいらしいのです。きつと照れくさいんでしょうね。だから取材は今回の経過を一番よく知って

いて、SODを勧めてくれたおばあちゃんに任せるといふんです」といふことでお祖母さまの美保子さんにお話を伺いました。

お手紙にもあったように、頭にニキビのようなものができたのが始まりだということ。いったいどのような出来物だったのでしょうか。

「最初は、ほんとうにニキビのようなものだったらしく、気にもとめていなかったといえます。爪か何かでひっかいたかなというくらい。すぐに治るだろうと思ってたら、そのニキビがだんだん大きく盛り上がってきたんです。これが1カ所なら、ひっかいたときに菌が入って悪化したと思うのですが、2カ所、3カ所と増え始めたんです」

「若いし、ニキビの延長線上のようなものでしょうと言われ、抗生剤の塗り薬をいただいていたんです。しばらくはその塗り薬を塗っていたのですが、全く良くならない。逆にいぼの周りの毛が抜けて10円玉くらいのハゲがいくつもでき始めたんです。これはもっと大きな病院で診てもらった方がいいと、総合病院の皮膚科に行きました。しかし、ここでも原因不明だと言われ、皮膚科ではなく、形成外科で診てもらったほうがいいと、形成外科を紹介されたんです。そこで言われたのが、慢性膿皮症という病気だったんです。それも、今の医療では決定的な治療法はないと言われました。ただ、もっと患部が大きくなって、頭上の大半がハゲれば皮膚移植という手術もできなくはないけれど、毛が元に戻ることはないと言われたんです。もう、絶望的ですよ。」

3軒目の病院で下された慢性膿皮症(※注1)という病気は、国から難病指定もされている完治が難しい病気でした。このとき亮太さんは16歳の高校1年生。ただでさえ周囲の視線が気になる頃なのに、治らない、一生ハゲというふたつの事実は相当なショックだったと思われます。

「そうなんです。すごく明るくて元気な子が、あのときから見る見る元気がなくなっていきました。家に閉じこもることが増えましたね。いずれサザエさんのお父さんのようになるんだ、僕の人生はもう終わった、なんて言うんです。学校に行くときは、薄毛を隠すスプレーをして行っていましたけど、もうかわいそうで見えられませんでした。」

毎日6包のSODを 欠かさず3年

病院で処方される薬では治らない、治療法もない、と言われた美保子さん。肌や、出来物にいい漢方や健康食品を探しているとき、ふと思いついたことがありました。

「もう20年ほど前のことなんです。知り合いの息子さんが小学生のときにアトピー性皮膚炎になったんです。かゆくてかきむしる、肌から膿が出て、赤黒くなる。医者からはアレルギーのある食べ物はずべてやめ、家のホコリもできる限り除去するように言われたらしく、大変な思いをしていらしたんです。そんなときに、すごく良いお薬に出会い、それを4、5年飲んでいたら、アトピーがすっかり良くなったんです。私もその経過を見ていて、本当に少しずつですが、赤黒くて象の皮膚のように硬くなっていた皮膚の下から新しいきれいな皮膚が出てきたり、膿が止まったりして数年後にはすっかり治ったんです。そのときのお薬がSODだったんです。私の中で、あのSODは本物だ、とひらめいたんです。」

保子さんもSODをお薬と表現されていましたが、いちおう薬機法等の関係上、断っておきますと、SOD様食品、通称SODはお薬ではなく、健康補助食品として認可されている食品になります。しかしお薬と表現する気持ちも理解できなくはないです」

「その日から毎日、SOD6包をヨーグルトに混ぜて亮太に食べさせました。見た目は、当時飼っていた亀の餌のような色になっていました(笑)、亮太も毎日欠かさず食べましたよ。少しでも希望があればと必死だったんでしょうね。」

食べ始めてすぐには結果は出ませんでした。

「でも、これしか方法はないと思っていました。それから1年くらいたった頃でしょうか。亮太が、ういえば最近、かゆみが出なくなっ

た、と言うんです。同時に、新しくできる出来物の数が減り始めたんです。もちろん小さなものばかりではいましたが、大きいものが出来なくなりました。そのうちイボ自体が少しずつ小さくなり、ハゲの部分に毛が生え始めたんです。これには病院の先生がいちばん驚いていました。2年目からは良くなっている実感が励みになりましたね。」

国立大学合格と完治 SODを勧めてくれた 祖母に感謝

そうしてすっかり完治したのがSODを飲み始めて3年目のことだったと言います。美保子さん曰く

「あの時、孫にSODを勧めていなかったら、今頃孫はどうなっていたかわかりません。」

奇しくも、その日は亮太さんの大学合格発表の日でした。パイロットになるのが子供の頃からの夢。そのために関西の国立大学を受験し、見事合格した日だったのです。美保子さんがうれし涙を流したのは言うまでもありません。

亮太さんがSODを飲み始めたのをきっかけに美保子さんもご主人も愛飲されているとか。

「私たちは1日2包ずつ、毎日欠かさず飲んでますよ。以前、送られてきた会報にも書かれていたように、ゴルフに行く朝や、ちょっと疲れたかなと思ったら少し増やしたりしています。おかげで風邪ひとつひかないですね。」

聞けば美保子さん、ゴルフは週に一回ラウンドし、趣味は音楽。シャノンソンは毎年発表会にも出演。他にもクラシックのコンサート鑑

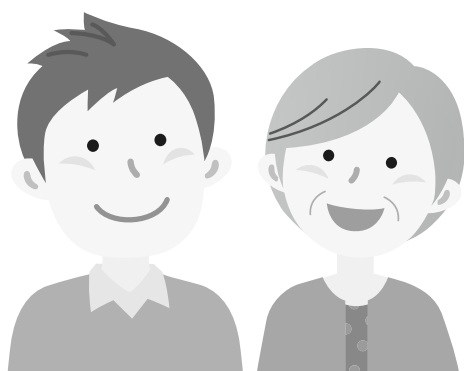
賞と忙しい毎日。

「毎朝Eテレでやっているラジオ体操をもう10年間欠かしていませんし、SODも毎日飲んでます。おかげで血管年齢や骨密度は63歳だと言われました。」

実年齢より10歳も若いのもうなづけます。

ご主人の会社を息子さんが継ぎ、今は夫婦ふたり。亮太さんは美保子さんのお嬢さんの息子さん。お嬢さんには2男2女、息子さんには3人。7人のお孫さんにも恵まれ、悠々自適のシニア生活といったところでしょつか。

「本当に、亮太が元気になってくれて、大きな悩みがなくなりました。これもSODのおかげです。もちろん、私たちも含め、亮太も



SODはこれからも飲み続けます。SODで少しでも多くの方の悩みが消えることを祈っております。」

なんだかこちらまで幸せのお裾分けをいただいたような、暖かい気持ちになりました。

慢性膿皮症という難しい病。何らかの遺伝子異常とまでは解明されたそうですが、そのなんらかは、何なのか、その解明にはまだまだ時間がかかりそうです。

※注1 慢性膿皮症

慢性再発性に細菌感染による炎症性病変を繰り返す、難治性の稀な常染色体優性遺伝性疾患である。本症は、患部に癬痕(傷跡)と瘰孔(炎症などにより組織に開いた穴)の形成を繰り返すため、患者に整容面(身なり身だしなみ、見た目)での多大な苦痛を与えるが、それに加え、瘢痕上に有棘細胞癌(皮膚がんの一種)を発症することが多く、生命予後にも大きな影響を与えるため、病因の解明が強く望まれていたが、その疫学や原因はこれまでほとんど不明であった。2010年に遺伝子変異により発症することが明らかになり、抗生剤投与と外科的切除以外になかった治療法に新しい開発が期待される。(難病情報センターHPより)

BOOK 紹介

『80歳の壁』
(幻冬舎新書)

『70代で死ぬ人、80代でも元気な人』
(マガジンハウス新書)

和田 秀樹 著

今回は、新書ベストセラーの10位以内に7冊もランキングさせた精神科医、和田秀樹先生の本です。ベスト10に7冊もランキングというのは、ランキングを発表しているトーハン(本の問屋さん)のようなところでも初めてのことだとか。そんななか、半年以上たった今でも1位を独走している『80歳の壁』(幻冬舎新書)と3位の『70代で死ぬ人、80代でも元気な人』(マガジンハウス新書)を紹介します。これらは、70代の中盤を占めるようになった団塊の世代以降の方に向け

た本ですが、そんな老親を持つ40代、50代、60代の人にも、長生きしてくれた親への新しい親孝行のすすめの本だと言います。

同調圧力に屈した人から 老いていく

著者の和田先生は精神科医として30年以上、高齢者医療に携わってきました。(詳しくは※注2参照) 現在62歳。東京都文京区で「和田クリニック」として体のクリニック院長をされています。以前、この会報で紹介した『コロナ自粛の大罪』(鳥集徹著)にも7人の医師の正体(鳥集徹著)にも7人の医師のひとりとして登場しています。先生の発言の中で特に印象的だったのが「コロナ自粛のために引きこもった高齢者が、数年後うつになったり、認知症になったり、足腰が弱って歩けなくなり、要介護になる可能性はとても高い」ということでした。そして「外に出ないから免疫力が落ち、がんなどの重篤な病気になる可能性も高い」と警鐘を鳴らしていました。その警鐘の矢が、今、団塊の世代に突き刺さり、次々と出版された本がベストセラーにつながっているように感じます。

その中でまず『70代でも死ぬ人、80代でも元気な人』を紹介します。もう、タイトルだけで内容を一刻も早く知りたいという欲求が出てきます。

冒頭で先生は、回復力や免疫力を高め、維持することこそが健康寿命を延ばす秘訣だと言います。そのためにはどうすればいいのかがこの本の本題ですが、世の中の現状は、コロナ禍の政府の政策やマスコミの報道でも分かるように先生の提言とは逆の方向に進んでいるそうです。冒頭にも紹介した高齢者のひきこもりによる悪影響もそのひとつ。

和田先生は

「この国の高齢者はいつからこんなに従順になったのか」と嘆きます。そもそもの70代の大半を占める団塊の世代は日本の経済発展を牽引してきた人たちです。

「団塊の世代は、勉強熱心で努力を厭わない世代というイメージがあります。非常に知的で、能力が高い。空前の受験戦争を戦い抜いてきた世代です。加えて反抗の世代でもありました。学生運動や反戦運動など、古い道徳や権力の弾圧に逆らい闘ってきた世代です。戦後の民主主義を築いてきた世代です。」

それがどうしてこんなに丸くなってしまったのか、個人の自由を奪う自粛の同調圧力に屈してしまっただけ、言うことを聞くようになってしまったのか。国やテレビ局の言いなりになっても、元氣のないしょぼくれた高齢者になるだけです。もう歳なんだから、世の中の流れなんだから」と周囲に言われても「それがどうした!」と胸を張ってやりたいことをやり続ける、70代、80代のほうがはるかに元氣な高齢者でいられます」

免許の返納は介護老人を増やすだけ

読み進むなかでいちばん驚き、納得したのが、免許返納はしないほうがいい、という提言でした。日本の高齢者のほとんどが、後期高齢者になったら、80代になったら、真っ先に考えないといけないのは免許の返納だと思っているはず。

「高齢者の車が事故を起こすたびに、在京テレビ局は免許返納を訴え、私は返納した親を説得して返納させた」と大威張りでコメントしました。でも、在京テレビ局は、地方で暮らす高齢者が免許を返納すればどれだけ不便になるのか全

く想像できていません。気晴らしのドライブだけでなく、買い物にも病院にも行けないのです。行政の様々な手続きもできないし、地域の行事にも参加できない。小さな用事でも子供夫婦などに頼り、遠慮していじけて暮らすことになります。まだ身体は元氣なのに氣力が衰えていくのです」

さらに実際に免許返納した高齢者のその後を調査してみると、6年後に介護が必要になる人の数は2、2倍に増えているという筑波大学の研究データがあるそうです。「国立長寿医療研究センターの調査では免許返納後の介護老人は8倍になるというデータもあります」

データで言えば、警察庁の原付以上の免許保持者の年齢別事故件数(平成30年)によると、最も事故を起こしているのは16〜19歳の1489件、次いで20〜24歳の876件です。一方、高齢者は80〜84歳は604件、85歳以上は645件、70代は500件前後です。

人口比で考えてみても、2025年には人口の4分の1が65歳以上になるのですから、高齢者より若い世代の方が圧倒的に事故の比率が多いことが分かります。

「しかも高齢者の事故は自爆が多

く、人を撥ねている事故の割合はそれまでの世代の約半分でありません。ところがひとたび高齢者が人身事故を起こすと、ニュースで大々的に取り上げられます。実際には高齢者の方が安全運転です。スピードは控えるし、無理な追い越しやあおり運転はしません。夜間の運転もしません」

先生は、日本の健康寿命がなかなか伸びないのは、こうした高齢者を自宅にひっこめる政策や、テレビの報道が一因になっていることは間違いないと断言しています。

70歳をすぎたら 血圧、血糖値、コレステロール値は高いくらいのほうが 元気で長生き



『70代で死ぬ人、80代でも元気な人』
(マガジンハウス)

データといえば、血圧や血糖値、コレステロールの基準値も臨床研究やデータではないと言います。

「今はアメリカ医学全盛で、アメリカは心筋梗塞が多いから(日本の2、5倍)コレステロールを下げる、血圧を下げるという。しかし、コレステロールは免疫力や男性ホルモンを高める効果がある。コレステロール高めの人の方がうつになりにくいという研究結果もあります。実際、高齢者の臨床をやっていると、血圧がちよつと高めとか、血糖値が高めの人の方が明らかに元気なんです」

とはいえ70代になると、同世代の知人友人たちが病気になるという話を耳にするようになります。さすがに用心するに越したことはない」と慎重になったり、もう若く

はないんだから、脂っこい物やお酒は控えなくては」となりがちです。しかし、先生は「今病気を抱えているのでなければ、自分で自由を制限することはないのです。70代は自分のやり

たいことを自由にできる、人生でいちばん幸せな高齢世代なんです」と言います。そしてやはり、薬のことに言及しています。病気でもないのに飲む薬、つまり、数値を基準値まで下げるために飲む薬は必要か?と。

高齢者施設でふらふらしたり、ボーツとしているお年寄りが多いと気づいた医者が、普段飲んでい

る薬を調べたら、あきれるくらい沢山の薬を飲んでいたので、しかも、やめても差し障りのない血圧や血糖値を下げる薬や、不眠の安定剤だったそうです。これらの薬をすべてやめたら、みんなしゃんとして、こんなにすっきりした気分になるのは久しぶりだと言ったそうです。「高齢者に正常な数値を求めるより、まずは元気になってもらうことのほうが大事なんです。ほとんどの医者が、数値(国が勝手に定めた正常値)の異常があれば、とにかく薬で正常に戻そうとする。治療よりもまず、とにかく数値を下げましょう」という。確かに心血管障害のリスクを高めるのは高血圧、高血糖、高コレステロールです。高齢になれば血管は弾力を失っていきま

す。だから数値を下げましょうというのは納得します。しかし、問題はその目標数値です。血圧が200あるとすると、医者

は130に下げるために強めの降圧剤を処方します。それで130以内に収まったからといって薬はやめられません。医者は数値を下げ、それを維持することが治療になってくるからです。一生薬を飲み続け、病院通いをしなければなら

糖値も少し高めのほうが元気で長生き」

と聞いています。

高齢者ではなく幸齢者

そしてベストセラー1位の『80歳の壁』になると、80代を迎えることが楽しくすら思えるお話が満載。そのなかのいくつかを紹介します。

まずは、80代になったら、してはいけない我慢や無理。みなさんは左記のことに思い当たりませんか？

- 本当は食べたいのに、健康に悪いかと、我慢してしまふ。
- 動くのがつらいのに、健康のためと、無理して運動してしまふ。
- 好きなタバコやお酒を、健康に

悪いからと、控えてしまふ。

● やりたいことがあるのに、もうトシだからと我慢する。

● 効いている実感が無いのに、長生きのため、予防のためと薬を飲み続ける。

和田先生いわく、

「これらはいずれも80歳を超えたらしくなくてもいい我慢や無理です。もっと言えば、してはいけない我慢や無理です」

気持ちがいいくらいに否定してくれて、うんと気がラクになりますよね。

また、歳と共に人はいろいろな機能が衰えていきますが、先生は、「幸せというのは本人の主観によります。自分がどう考えるかによって決まってくる。自分の老いを嘆き、できなくなったことをないないと言うよりも、

『80歳の壁』(幻冬舎)



老いを受け入れ、できることを楽しむほうが幸せではないでしょうか。おむつや杖を使わないと外出ができなくなったと嘆くよりも、こんな便利な物があるならどこでも行け

る、と考えたほうが幸せです」

そういう意味で、先生は『高齢者』のことを『幸齢者』といいます。

「実際、ストレスがなく、楽しそうにしていると免疫力が上がり、ボケの進行も遅いんです」

そのために、健康診断などはしないほうがいいと言います。

日本の平均寿命の男女差は、半世紀前に3歳差くらいだったのが、今、女性のほうが6歳長寿です。しかし、健康診断の比率はその逆で、検査を受ける女性のほうが圧倒的に少ないと言います。健康診断が長生きにつながるのなら、男女差は逆のはずではないかと。

「健康診断はがんの早期発見につながります。(かえてって具合が悪くなる人もいますが)といってもそれは60歳以下の人の場合です。80歳を過ぎた幸齢者の場合は問題がありません。健診で数値が正常でないと、薬が処方され、そのためにかえって体の調子を落とす人や、残っている能力を失ってしまう、寿命を縮めてしまう人がいるからです」

同様にがん検査もほとんどが必要ないと言います。

「亡くなられた85歳を過ぎた方のご遺体を解剖すると、ほとんどの人の体になんが見つかりません。でも亡くなられた原因はがんではなく

別の病気でした。つまり幸齢者になれば誰の体にもがんがあり、本人が気づかないことがほとんどだということなんです」

知らぬが仏ということわざがありますが、まさにその通りかもしれません。検診でがんが見つかった、というところとほとんどの方が人生終わった、くらいの気持ちの落ち込みようだと言います。丹羽先生始め、会報で紹介してきた多くの先生が、

「検診結果の是非がストレスの元」といいます。

「特にがんの進行の遅い幸齢者の場合、放っておいても大丈夫なケースが意外に多いのです」

だったら、がんにならないためにといていろんなことを我慢する必要はないのかもしれない。つまり、先に挙げた我慢はしないほうがいい、という先生の提言につながってくるのです。

「老化より朗化です」

『80歳の壁』の壁とは、これまで我慢してきたことの高い壁を低くして、軽々と超えて長生きしようということでした。

私事で申し訳ないのですが、私も10年近く前に80代半ばの両親を相次いで看取りました。どちらも

要介護3で田舎生活をしていましたから、最後の1年は施設に入っていました。施設に入る前、まだ父がひとりでもできる70代後半に私は免許返納を強制し、喫煙をやめさせました。すると、ボーっとする時間が増え、父も老けたなと思っていたら、トイレで転び大腿骨を骨折してしまいました。入院した折りに胃がんがあると医師に告げられ、手術を勧められました。今なら80代でがん手術などしなくてもいいと断言できたのですが、当時は兄弟に強く押し切られ、結局手術をしました。術後、医者が出した大きな胃をトレイに乗せて「ほらこんなに大きいがんでしたよ、全部とりましたから大丈夫」と自慢げに見せてきたのが忘れられません。結局、父は2度の全身麻酔手術により、認知機能と運動機能が急激に落ち、さらに胃を全摘したので食欲も落ち、あつという間に亡くなりました。母は母で、血糖値が高いからと、大好きな甘い物を控えるように医師から言われていました。それでも施設でこっそりお菓子を食べていたらしく、部屋からすべての食べ物が撤去され、子供のように泣いていました。その時も、医者言うことを守るのも母のためだと思っていたのです。

あのとき、父の免許を返納しないで、タバコも好きなようにさせてあげていたら、手術なんかしていなかったら、好きなだけ甘い物を食べ、母が幸せな気持ちになれていたなら、と後悔し、父や母に謝りたい気持ちでいっぱいです。医者の言うことを鵜呑みにしていた、無知だった自分が情けない。どうかみなさんは、こんな思いをしない新しい親孝行、そして新しい幸福者になっていただきたいと心より願います。

※注2 和田秀樹先生プロフィール

1960年大阪生まれ。東京大学医学部卒業。東京大学付属病院精神神経科助手、米国カール・メニンガー精神医学校国際フェローを経て、現在、和田秀樹こころと体のクリニック院長。高齢者専門の精神科医として30年以上高齢者医療の現場に携わっている。「老人医療のプロフェッショナル」でありながら、受験、教育の論客としても知られ『テレビの大罪』（新潮新書）『この国の息苦しさの正体』（朝日新書）など著書多数。

SOD様作用食品 体験者の声をお聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川 1-15-2 B棟2802

日本SOD研究会 宮城宛
TEL 03-5787-3498

までご一報下さい。

当研究会の許可なく、すべてのテキスト、画像等の転載、複製、転用を固く禁じます。また、まとめサイト、ブログ等への引用を厳禁いたします。

和田秀樹先生の著書

2022年9月のトーハンベストセラー新書ランキング

- 1位 『80歳の壁』(幻冬舎)
- 2位 『70歳が老化の分かれ道』(詩想社)
- 3位 『70代で死ぬ人、80代でも元気な人』(マガジンハウス)
- 5位 『老いの品格』(PHP研究所)
- 7位 『70歳の正解』(幻冬舎)
- 8位 『80歳の超え方』(廣済堂出版)
- 9位 『60歳からはやりたい放題』(扶桑社)



計報

丹羽鞠負(本名 耕三)先生が9月18日ご逝去されました。享年89歳でした。私たちが最後にお会いしたのが今年の4月でした。東京にいらしたときには定宿にいらした帝国ホテルの談話ロビーで1時間ほどお話ししたのが最後でした。合掌。遅くなりますが、次回の会報では丹羽先生が残された数々の医療への功績や情熱などを特集したいと思っています。

なお、全国の診療所ではこれまでどおり丹羽療法の診療を続けます。詳しくはお近くの診療所にお問い合わせください。

●SOD様作用食品とは●

丹羽博士の開発

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力ぎを握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されません。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽朝負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に



二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理」は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。病気は自分が治すもの、私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐丹羽クリニック院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。

最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。

「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのではないか？」というような、ご質問をよくいただきます。

その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴



原寸大 横 30mm、縦 25mm

- 管理番号は6桁
※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- シール左部分に絵や記号が記載されている
※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- 他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある